

JICA 中国事務所ニュース

(2007年1月号)

1. 最近のトピック

(1) 青年海外協力隊派遣 20 周年を記念した

各種行事が開催！

1985年10月に日本政府と中国政府間で締結された派遣協定に基づいて、初めて中国に青年海外協力隊員が派遣されたのは、1986年12月のことでした。

それ以後20年が経過し、中国に派遣された協力隊員数は累計で600人を超えましたが、この記念すべき20周年を祝うための様々な行事が昨年末東京及び北京にて行われました。

まず、12月19日(火)には、東京の中国大使館において、記念交流会が開催されました。交流会には海部元首相を初めとする国会議員や外務省、JICA関係者、さらには帰国隊員等計80名が出席し、各参加者からの祝辞と共に、帰国隊員による中国民族楽器の演奏などが行われ、参加者から大きな拍手が贈られていたそうです。

続く12月20日(水)は、午前中は日中マスコミと協力隊員との懇談会が開催されました。あいにく六カ国協議のタイミングと重なってしまい、日本側中国側合わせて計3社のみの参加であり時間も限られていましたが、協力隊員の生きた声を聞いていただく貴重な機会となりました。

同日の午後は中旅大厦において、宮本大使や科技部の呉副部长(副大臣)、JICA本部からの上田理事などのご出席の下での記念式典及び記念シンポジウムが開催されました。



記念式典の会場の様子

式典には来賓、ボランティア、北京在住の協力隊

経験者が参加しただけでなく、隊員の恩師である二本松訓練所の語学講師、北京の語学講師も駆けつけ、久しぶりの再会に懐かしそうに話し込む姿も見られました。

式典は各ご来賓の挨拶が中心で大変粛々と進行していきましたが、会場には予想を上回る250名強の方に参加いただき、大変な熱気に包まれていました。

会場が一番盛り上がったのが、式典の後開催された記念シンポジウムの中で行われた派遣中の隊員による活動紹介でした。派遣中の協力隊員は60名以上いて、全員の活動を詳細に紹介することは難しかったため、

①中国で活動するボランティア全体の紹介、②四川省涼山州で活動している協力隊員とプロジェクト専門家によるボランティア活動の紹介、③看護師隊員の活動紹介、の大きく3つに分けて紹介が行われました。



涼山の発表をする増田シニア隊員

これらの発表は、各隊員が活動の合間を縫って、自分のパソコンで映像や写真、音楽を組み合わせで作成した映像を使って行われましたが、小田和正の「言葉にできない」などの音楽をバックに、隊員が中国で活動してきた中でぶつかった苦労や思いなどが、笑顔に満ちた写真と素直な言葉で紹介され、参加者の間で大変な感動を呼びました。発表を見ていた隊員も自分の活動にだぶるものがあるのか、目を潤ませる姿もありました。

その後引き続き行われたパネルディスカッションでは、「中国の発展にボランティアが果たしてきた役割と今後の可能性について」をテーマとして、協力隊 OV や現役の中村直子隊員などによる熱い議論が交わされました。

同日夕方には、日本大使公邸でのレセプションが行われました。スピーチコンテストに参加する予定の学生も参加し、現役隊員の隊次別自己紹介や OV 隊員からの挨拶など、おいしい料理を食べながらの歓談で、参加者全員が非常に心温まるレセプションとなりました。

翌 21 日には、日頃日本語隊員が教えている学生の各学校の代表 1 名ずつが一堂に集まり、「青年海外協力隊派遣 20 周年記念日本語スピーチコンテスト」が行なわれました。



スピーチをする学生

午前中が高校の部、午後が大学の部でしたが、各校の代表者が白熱したスピーチを披露し、どの学生のスピーチも素晴らしかったため、審査員は審査結果をまとめるために大変悩まれていたようです。なお、各生徒を引率してきた日本語隊員たちは、北京に来るのは初めてという学生ばかりだったことから、親のような気持ちで学生の発表を見守っていたようです。参加した学生たちは、北京に来たことや、スピーチコンテストに参加した他の地方の学生と友達になったことが大変大きな思い出となったようです。

以上、大変盛りだくさんの記念行事でしたが、個々の行事が成功裏に実施されただけでなく、協力隊の活動が日中マスコミにも多く取り上げられたことから、広報の観点からも大変意義が大きい事業となりました。(ボランティア班)

(2) 山西省雁門関地区生態環境回復及び貧困緩和プロジェクトの開始を合意

和プロジェクトの開始を合意

2006 年 12 月 5 日山西省太原市において、当事務所古賀重成所長と山西省科学技術庁廉毅敏庁長との間で技術協力プロジェクト「山西省雁門関地区生態環境回復及び貧困緩和プロジェクト」の概要等を定めた協議議事録 (R/D) の署名・交換を行いました。



協議議事録(R/D)の署名

プロジェクト対象地の山西省雁門関地区は山西省の北部に位置し、黄砂の発生源の一つである黄土高原地帯に属しています。黄土高原はタクラマカン砂漠等で発生した黄砂が積もってできた土壌のため雨が降ると流れやすく、総面積の約 70% で土壌流出が発生しています。また、年間降雨量が 400 ミリ程度、無霜期が年間 100 日以下といった自然条件のため面積当たりの農業生産性が低く、農民は山の上まで開墾を行っています。この開墾により土壌流出が促進され、土壌流出が土地を疲弊させ、土地の疲弊による生産量の低下が貧困を生み、貧困が農民に更なる過剰耕作を余儀なくさせているという悪循環が生じています。



山の上まで開墾され、表土が露出している

本プロジェクトでは、主に傾斜地に土壌保全を目的とした多年草の牧草等を栽培して表土の被覆保護を高め、同時に牧草を使った畜産を振興することにより農民の

生計向上を目指すための取り組みを行います。



窑洞（ヤオトン）式住居で生活する農民も多い

プロジェクト期間は4年間で、2007年3月から専門家の方がプロジェクトオフィスのある山西省太原市、モデル県の右玉県、樓煩県にて活動を行う予定です。（業務班/西村暢子）

(3) 首都周辺風砂被害地域植生回復モデル計画調査の調査概要を合意

2007年1月10日に北京市において、当事務所渡辺雅人次長、国家林業局国際合作司劉紅燕副司長、北京市園林緑化局甘敬副局長、河北省林業局葛会波副局長との間で開発調査「首都周辺風砂被害地域植生回復モデル計画調査」の概要等を定めた実施細則（S/W）の署名・交換を行いました。



実施細則の署名式

中国では毎年のように黄砂が発生し、中国にとどまらず韓国や日本などの周辺国にも甚大な被害をもたらしています。2006年春には2002年以降最大規模の黄砂が猛威を振るい、中国では砂嵐が原因で死者や健康被害を訴える人が続出したほか、農作物などに影響が出ました。首都北京も一晩で大量の黄砂が降り注ぐ等、甚大な被害を受けました。中国政府は

2000年に六大林業事業を開始し、その一環として北京と天津を黄砂被害および砂漠化から守ることを目的とした北京天津風砂源整備事業（北京天津周辺の5省・自治区・直轄市において植林、植草による植生回復を行う）を実施しています。しかしながら、各県レベルでの植林のための計画や調査手法が確立されていないため、計画と自然環境との整合性が不十分、黄砂対策としての効果が十分でないといった問題が顕在化しています。



2006年4月に北京市黄砂被害が発生し、4月17日には一晩で30トンの黄砂が北京市に降り注いだ。

本開発調査では、北京市への黄砂の進入口となっている北京市北西部4区県（北京市昌平区、門頭溝区、延慶県、河北省懷来県）を対象地域とし、2007年3月から3年間をかけて、北京や天津周辺への風砂被害を軽減に必要な森林植生回復のための実施計画を策定し、実施計画の事例提示のためのモデル林造成支援を行う予定です。

この他、既に実施中の技術協力プロジェクト「日中林業生態研修センター計画」において、北京天津風砂源整備事業が実施されている5省・自治区・直轄市の林業技術者を対象として連携研修を実施する予定です。



北京市北西部には砂丘が広がっている（万里の長城八達嶺から数キロ）

(4) 上海での研修員向けオリエンテーション

昨年12月初めに、科学技術部の上海研修センターを訪問し、科学技術部が実施しているJICA研修員向けの出発前オリエンテーションの状況を視察する機会がありました。中国から日本へ出発する研修員については、基本的にはJICA中国事務所でオリエンテーションを実施していますが、南部の一部の省から参加する場合は、2005年11月より、この上海にある科学技術部の上海研修センターで彼らの出発前オリエンテーションが実施されることになっています。

オリエンテーションの内容は資料配付、ビデオ放映及び注意事項の説明等が中心であり、今年度は計40名前後の研修員が当センターでオリエンテーションを受ける予定となっています。

オリエンテーションでは、まず、各研修員に対し、JICAの最新情報、国内機関の生活環境、事前に準備すべき日常用品、交通ルールの説明等が行われます。特に日本到着後の注意事項として、日本文化或いは他国文化を十分尊重すること、交通安全を注意すること等が説明されていました。



同センターでの英語試験の様子

さらに、同センターでは、JICAの集団研修に参加する人員の選抜のため、毎年12月の第二の日曜日に全国共通の英語試験が行われます。この試験に合格した人がまずJICAの集団研修に参加する資格を有することになっています。この試験に参加するには、毎年8月中旬に同センターより各省（自治区、市）の科技庁、局に関連通知が出され、各省、市の科技部門から選出、推薦された試験参加者が試験を受験することになっています。

英語の試験はヒヤリング30分と筆記試験2時間30分、合計3時間であり、難易度は全国公共英語等級試験（PETS）の五級に相当する難しいものとなっ

ています。

この厳しい試験に合格しても、JICAの集団研修に参加するには他の途上国からの候補者との競争になりますので、必ずしも全員が日本に行けるとは限りません。

研修業務の実施を担当する者として、今回この研修センターを視察することができ、今後の業務実施の方法を検討するためにも非常に良い機会となりました。（相互理解班/李瑾）

(5) CDMセミナー ～JICA初の対中国CDM(クリーン開発メカニズム)支援～

目覚ましい勢いで経済発展を続ける中国は、温室効果ガス排出量が全世界の15%(米国に次ぐ世界第二位)に達しています。2002年8月には京都議定書を批准し、2004年6月には「CDMプロジェクト運営管理暫定条例」を施行し、国家発展改革委員会（National Development and Reform Commission: NDRC）内に指定国家機関（Designated National Authority: DNA）を設置しました。こうした実施体制の整備とともに、NDRCを中心に科学技術部(以下、科技部)や財政部等の関連機関はCDMへの取り組みを強化していますが、CDMプロジェクト開拓の現場となる地方で、CDMプロジェクト設計書（PDD）の作成を行う科技部の能力不足などの問題があり、中国におけるCDM事業実施の障害となっています。

このような背景を受け、科技部傘下の地方CDM担当官の能力強化を目的に、CDM現地セミナーが、2006年12月18日から22日の5日間、北京で実施されました。

セミナーには、16の省及び自治区から、地方科技庁の担当行政官、CDMのセンターの職員、大学や研究機関関係者ら計50名が受講生として参加。日中両国の講師陣の顔ぶれも錚々たるもので、日本側からは世界的にも著名なCDMメソドロジーの権威であるクライメート・エキスパーツ社代表の松尾直樹氏が、また中国側からもCDMにかかわる超一流の講師陣が多数参加しました。



北京で開催された CDM セミナーの様子

セミナー参加者からは、CDM に関する積極的な質問と、JICA の CDM 事業に対する強い関心が示され、総合的に高い評価が得られました。

特筆すべきは、異なる省庁間の協力が余り見られない中国において、科技部と NDRC が組織の縦割りの壁を取り払い、CDM 事業の効果的な実施に向けて連携したことです。

科技部主体である本セミナーに NDRC の気候変動対策弁公室の孫翠華処長が開会の辞を述べたほか、講師も務めるなど積極的に協力しました。本セミナーの様子は China Daily (中国日報) でも取り上げられ、また、NDRC 及び科技部のホームページにも「JICA の協力が地方の CDM プロジェクトのキャパシティビルディング強化に寄与した」と掲載されました。

本セミナーは、JICA として初めて中国に対し実施した気候変動分野における案件です。今後も、CDM 分野の研修が、2007 年 3 月に日本で実施される予定で、科技部関係者が来日する予定です。さらに、NDRC とも、中央および地方政府の DNA としての行政能力向上を目指した技術協力プロジェクトを立ち上げようとしています。

今後も日中 CDM 協力には目が離せません！
(企画調査員/長安美恵)

2. 主な調査団 (派遣中・派遣予定) (12-1 月)

- 1/13-19 草の根技協現地モニタリング調査
(山西省、大連)
- 1/15-22 草の根技協現地モニタリング調査
(内モンゴル、江蘇省)
- 1/7-24 農村社会養老保険制度整備調査
本格調査

3. 12月～1月の主要行事

- 12/20 青年海外協力隊派遣 20 周年記念行事
(式典、シンポジウム、レセプション)
- 12/21 青年海外協力隊派遣 20 周年記念
日本語スピーチコンテスト
- 1/11 JOCV18 年度 2 次隊着任

4. 専門家・ボランティアコーナー

今回は、吉林省で活動中の山本隊員からの投稿をご紹介します。

中国東北地方の冬は非常に寒く、厳しい。時には零下 20℃ を越すこともあるぐらい。しかし、それでもこちらの人はみんな冬が大好きだ。ピンと張り



詰めたような空気、真っ白に輝く雪景色、そして抜けるような青空。それは時に荘厳な美しさをかもし出す。写真のような景色もその一つ。これは東北の中でも吉林市周辺でしか見られない「霧凇」である。近くを流れる松花江の水が温められ、その水蒸気が厳しい寒さによって凍りつき、木々をまるで雪の花が咲いたかのように彩る現象である。中国四大奇観の一つにも数えられるこの「霧凇」。気候条件が整った時にしか現れず、いつ見られるかは運次第。だが、これを見るためだけに吉林まで来る価値はあると思う。本当に、そのぐらい美しいのだ。

「零下 20℃」というこちらの外気温を聞くと、大抵の人は「そんな寒いところなんて・・・」と敬遠してしまうだろう。実際、こちらに来るまでは私もそう思っていた。しかし、東北地方の魅力はやはり冬にこそあると思う。ここ吉林で過ごす 2 回目の冬、そして、私にとっては最後の冬。その魅力を思いっきり満喫しようと、これまた東北特有の「暖気」の

効いた暖かい部屋からいかに抜け出すか、葛藤の続く毎日である。(17-1 吉林市朝鮮族中学/山本晋也)

* 昨年末の 12 月号は、事務所の都合により休刊とさせていただきます。今年から気持ちも新たにまた事務所ニュースを発信していきます。専門家、ボランティアの方々からの情報提供、大歓迎です。また、本紙に対するご意見、ご提案などもいただければ幸いです。いずれも中国事務所周南 (zhounan.cn@jica.go.jp)あてにお願いいたします。